

Title	ヘルマン・ヘッセに於ける東洋思想概観
Sub Title	The oriental views of Hermann Hesse
Author	飯田, 國男(lida, Kunio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1957
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.7, (1957. 12) ,p.34- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00070001-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヘルマン・ヘッセに於ける東洋思想概観

飯 田 國 男

「デーミアン」で予感され、それに續く作品「クラインとワーグナー」、「シッタータ」、「湯治客」、「荒野の狼」、「ナルチスとゴルトムント」、「東方巡禮」そして「硝子玉球戯」までその中に繰返し表現されている一つの精神的風光がある。それらは背後に夫々異なる問題や情調を持ちながら、相互にはつきりした共通性が認められる。試みに「荒野の狼」から引用してみよう。それは不死なるもの等の一人、モーツァルトに自分の苦惱を嘲笑されてかつとなり、その辨髪にとびついた彼が、流星の尾にぶらさがつたようになって、一緒に虚空をひき廻されるところである。「この世界は又何と冷たかつただろう。之等不死なるものはおそろしい稀薄な氷の空氣で平氣でいるのだ。でもこの空氣は氣持よかつた、氣を失う前にちよつとの間感じたのだが。身を切るようなすみ渡つた清明さに身を貫かれ、モーツァルトが笑つたと同じように、明るく荒々しく、そしてこの地上にかかわりなく笑いたくてたまらなくなつた。」このモーツァルトの笑いは「一片の神學」という小文の中で書いている、眞の人間になる三つの段階の、その最後の境地からのぞまれるものであろう。(彼はよくこの、人間になること)〈Menschwerdung「化身」とゆう意味の語〉或は自「實現」〈Selbsterwirklichung〉という言葉を使う。即ち、罪を知らぬ天國、或は子供の前段階から、責任や善惡の知識、文化や道徳や宗教や人間の理想の要請の中へ、第二段階へ入つてゆく。そして、此の段階を各個人が自分の身で、最後まで生き抜いてみれば、それらの要請を全く充たすことは不可能であるという絶望に陥入る、その時、人は没落するか、第三の段階に入るかである。そこは精神の世界、道徳、法則の彼岸の状態、高次の、責任のない状態、或は信仰と言つていい段階である。我々の認識を超えて一つの神、或は「何か」があるということである。この彼の言う

人間の最終段階は、キリスト教で恩寵と呼び、東洋では、印度でアートマン（真我、之に對し宇宙我をプラフマンと言ひ、この二つは同一であるとバラモン教で言つている）、中國では老子の道と呼ぶところのものであると彼は言う。

ヘッセが畏敬を以て遍歴した東と西の宗教、そこにはユダヤ教から異端をも含めたキリスト教、印度のヴェーダンタからヒンズー教まで、中國の易經から老子や孔子その後の思想家に至る思想がある。之等の思想や、又大乗佛教、禪などから、ヘッセの思想との微妙な照應と離反を明るみに出すことは到底及び難いことであるので、大きく先ず、その概観を得ることをこの文の目的としたい。

* * *

ヘッセと東洋との關係を外から見ると、既に母方の祖父が印度でプロテスタントとして傳道に従事し、父母も一時布教で印度に居たことがある。子供時代、家庭にもよく東洋人の來訪があり、極く自然に東の世界を呼吸していた。世界の宗教に段階などないということは、このような中で次第に悟つたのである。（キリスト教は絶えず彼の根柢にあるわけであるが、その現實に現われた制度である、教會には背を向ける傾向にあつた。之はカトリックの友人フーゴ・バルと親密な交わりを持つた時に、カトリック教會に對して表明された疑惑にもうかゞわれる。）第一次戦前に自身、印度、東南アジアを旅行しているが現實のインドにはただ疲れきつて歸つてきたようである。

又、中國思想についてはその存在を三十すぎる迄知らなかつたと言つているが、第一次戦中には、屢々、書庫の中で中國の智慧に耳を傾けていた。因みに中國の古典がリヒャルト・ヴィルヘルムの優れた翻譯で次々に本腰に紹介されたのは一九二〇年の初めからであつた。この事實を知つて次の文章の感動もうなずける。「序々に何年かの間隔をおいて、印度人、中國人、キリスト教徒の中に人間存在の同じ解釋に再會すること、又核心を爲す問題の予感が確證され、どこでも同じような象徴によつて表現されていることを見るのは私の最も意義深い精神的體驗であつた。」（「一片の神學」）

扱、西洋と東洋の違いということは、古來様々な人が、いろいろな觀點から説いている。例えば、西洋の動的、東洋の靜的、積極と消極、理性の文化と感情の文化、物質主義と精神主義、此岸と彼岸、民主と獨裁等々。スイスの婦人で長い間、中國と日本に居たりリイ・アベックは之等の見解に夫々反論の述べ得ることを示し、自分は心理の面から説明しようとする。以下彼女に従つて見ていこうと思ふ。

先ず、人間は誰でも統一的な心を持つてゐるが、西歐人にあつては、この一本の線から心の持ついろいろな能力——知性とか意志とか感情とか——が大きな弧を描いて離れてゆき發展するが、東洋人にあつては、統一、全一が飽くまで主體となり、心の様々な能力は絶えず散發しつつも、直ぐにその主體にもどる傾向があると言つてゐる。そして、ここから、地球上、西歐以外どこでも發生を見なかつた科學と進歩という輝やかしい現象を説明してゆく。しかし又この進歩の思想が、どのように發展し、科學がどこに到達したかは今見るようである。ヘッセは、現代は「進歩の強烈な自信で進行してきた文化が突然、無の暗黒に直面した時代である」と述べてゐる。又、文明人の生活について、「自分の生活に對する嚴密な批判をさまざまに……人生の曖昧さ、絶望的な悲哀や荒廢をさとの妨げとなつてゐるのは、この永久に繼續してゐる機械運動である」とも言つてゐる。生活の機械化と集團化を時代の特徴としてゐる。ゲーテは既に「技術的な世紀は出來得る限り促進されねばならない、それだけ早く没落するように」と言つてゐる。その如く、人間の統一的人格が益々脅やかされ、魂の平板化を齎すこのような時代に「人間」が反抗して統一的な思想を求めようとするのは當然な欲求である。アベックは、統一の思想、その智慧を初めから持つていた東洋思想を西洋の科學と進歩と並べて、優れた人類の精神の成果と見ている。しかしその東洋は、進化の思想を最初から無批判に拒否した、ところが西洋は無批判にその全能を信じたので、共に進歩の思想の妥當する領域を見極めなかつたと解する。

扱、ヘッセは、このような西洋の分裂を、第一次戦前後、烈しく自己の中に體驗した。この自己の中の分裂に統一を齎すことが、彼の、世界と自己に對する課題となつた。彼は第一次戦後のヨーロッパ精神の混亂の中にあつて、丁度、自分の家庭の崩壊も重なり、内面も崩れ去り、どこにも足がかりをなくし、「自己自身につきもどされ、さし向かいにさせられた人間」となつて、暫らく、ソナムットの精神醫ラングのところ居ることになる。分裂の諸相は、餘りにも「健全な」満足した市民達に對照して「荒野の狼」や「クラインとワグナー」等の中に徹底して描寫されている。「湯治客」では「或る時代の下では、總べての理想を犠牲に供してその時代に順應するより、精神病者になることの方が一層價値あり、高貴であり、一層正しくはないか、というのは人を感動せしめる恐ろしい問題である」と言つてゐる。精神の分裂を自己の中の意識と無意識の分裂として、無意識の領域にあるものを一つ一つ意識の領域に上せ、葛藤のない統一を齎そうとする努力が續けられる。しかし、精神分析は、危険を孕んだ臨牀的な應用面よりも、實驗、分析、推理によつて一歩々々發見し、前進していく科學であり、殊に發展段階にあるものと思われる。印度や中國の思想は初めから生きた人間が擲んだ有機的統一であり、一つの生命を全的に直截に求め實現したものである。精神分析はヘッセの心を決定的に内に向けるのに大きな役割をしたが、彼に最後まで主導的な意味を持つたのは特に印度や中國の思想の持つ魂の衛生であつた。グネフコウが精神分析は以後彼に表現の豊かさを齎したというのはそういう位置づけがうかゞわれる。一讀、非常に精神分析の要素の強い「クラインとワグナー」に於ても、それだけでは、救済の可能性があり得ないのは、その最後の部分で、入水したクラインの幻影に於ける三元の止揚にもうかがわれる。人間のうちに、又人間と世界に統一・和解を得ようとする課題は永遠に一つである。そして人間の環境は永遠に變わる、時代に於ても、一個人に於ても。殊にその課題の實現するのに難しく思われる時代に、ヘッセは内心の衝迫に促され、彼の所謂、時、空を超えた「東方巡禮」の内面の旅を、自己自身への道を歩み始めたわけである。

*

*

*

先ず、ヘッセの終生の問題であり、生活と作品を動かしていく根本の強い力は、衝動と精神、自然と超自然というような、自己の内部にも世界の中にも見られる対立である。

現代の物理学では二元論の止揚ということが言われ、一つの事柄に対して對極にある二つの發言が共に正しく相補的な關係にあるとされ、之によつて今迄一つだけの原理、例えば因果論によつて得られていた知識よりも、嚴密さは失われてもより眞實に近づいていくと主張されるのである。(アベック)

キリスト教に善惡の非常に苛烈な二元論がある。この絶望的に融和し難い原罪があるからこそ、神の側からの恩寵があり得るわけである。しかしこの固定的な二元論は、現實の社會にあつては屢々道德の領域に止まりがちである。アウグスティヌスは乳呑兒が母親の胸に乳を呑んでいるのを見ても既に罪を感じると言つたのであるが、東洋ではこのような罪の觀念は考えられないところである。従つて十字架のない、仲介者の缺けている神祕主義となる。例えば易經の陰陽には善惡の觀念はなく、それは創造するものと受けるものという世界の二つの原理である。そして各々の中に他方の萌芽を抱いており、次々に他方へ移つてゆく流動的性質を持つている——老子の善もいつも相關概念である。ヘッセは美と魂、善と惡、などは一瞬だけ對立する概念であると言ふ。一部分を特に強調することなく、全體として宇宙の運行のように調和的に考え、二つの相反する如きものも、流動し合い補い合うと考へるのは特に東洋に特徴的であり、ヘッセの終生の問題である兩極性と統一に大きく相い應じた事は領けるのである。ヘッセが追悼文を書いているシュレンプフという神學者は牧師の職を逐われた人であるが、「神的なものが歴史に入つてくる時、必然的に二義あるものとなる、歴史の中の神性は同時に神であり惡魔であり、同時に善であり惡である原理である」と言つてゐる。デーミアンに於けるアブラクサスという創造神を思い出す。(尤も精神(父)と自然(母)はデーミアンに於ける後者の強調から、次第に精神の強調に重點が移つていく。例えば一九一九年に書かれた「カラマソフの兄弟或はヨーロッパの没落」、「ドストエフスキの「白痴」について」と、ヒットラーの下で行われた殘虐行爲の最初の印象の中で書かれた「省察」とゆう詩を比較してみると、この間の事情は明白である。しかしその際常に對立する一方の權利は確保されている。)畏敬・敬虔という態度は、その對象として、生・世界の全般を包むのである。「湯治客」では、「すべての苦痛

なものやばかげたことや邪魔なものも、一切を神と観じて禍福善惡を超えた根本にまで達して見る時、全然反對物に化してしまふことも知つていた。」とあり、この兩極の肯定は、ユーモアをもつて次のようにも言われる。「現實は常に矛盾します、精神だけは矛盾しません。徳性は矛盾しません。餘り尊敬できないあなたは矛盾しません」。之に關聯して、「シツタルタ」を讀んでいて感ずることは罪という問題が稀薄なことである。そこにある苦しみは統一調和からの離反状態にある爲の苦惱である。キリスト教の罪も調和の喪失には違いないが、對象が怒りの神、嫉みの神と言われる倫理的な人格神であり、キリストの十字架がある爲に緊張状態に感情的な烈しさが加わつていふように思われる。アベックは祈りと瞑想をあげて、その差を述べている。

又、個人主義、個の強調のない人格主義という點も、東洋の特徴としてあげられている。之は簡単に近代以前として片づけられるべき問題であらうか。そこでは社會に對立して故意に考へ得る特色を強調するのではなくて、或る人間典型を實現することが中心事になつてゐる。精神分析で言う偽の自分、社會に對してかぶつてゐる面、ベルソナを取除くこと、かういふ魂の衛生學とでも言うべきものが東洋には昔からあつた。「硝子玉球戯」では無記名の文化という未來の理想社會が描かれてゐる、全體の中に出来る限り組み入れ、超個人的なものに奉仕する人々である。自己自身になる、自己の道を行くという事は、特殊になることが目標なのではなく、結果から見ると一つの典型を一回限りの自分の身でもつて生きるという事、その爲に闘ひ、その爲の自己拋棄を行うことなのである。そうなればその典型を、この特殊な自己に於て生き抜いたことであり、そこから充實した言葉も生れる。ヘッセの關心のおき方は、外面的な目立つ特殊性ではなく、内部の誠實に生きぬいた魂に向けられてゐる。然しその際、全體の解き難い一部と感ずることは劃一化を意味しないことは勿論で、ヘッセの執拗なナチスへの反對、又ジイドに宛てた手紙(我々が個に徹する人間の最後の者達ではないだろうかと言つてゐる)、機械的劃一化に陥入り易い危險を持つ共產主義政體への反對に認められる。彼の指す全體は、東洋の思想に見られる人生と世界の多様の背後にある統一的な全體を指している。

思考法に於て西洋と東洋の差としてアベックが述べるところは、前者に於ては思考が論理に従つて一本の直線になつて目標に進んでいくが東洋にあつてはその目標を圍んで様々の立場から、論理のない思考、直觀がとり圍むと言ふ。(例えば老子の道德經があげられ

るだろう。)そしてその夫々が一つの試みとしての直観なのである。東洋に於ける全人間的な思考、ドイツ語で denken というより少し古風な denken に當る働らきと説明されている。シッダルタに於て、〈思考學識という假我〉へ感覺という假我は共によきものである、その背後に究極の意義はひそんでいる、という言葉がある。又「知る必要のあるすべての事を自ら味わう」ということはよい事だ、この眼で、この心で、この胃で知つた、と。知るといふことはこのように見られている。感情が人間の根柢にあることは大拙も指摘するところである、一番原始的素朴な能力であるとしても、又最終の眞實へ導く機能を持つてゐる。ヘッセの敘情的性格は、第一次戦後思考の自己沈潜に鍛えられ變貌して、眞に敬虔なるものへの使命を擔つたように思われる。

扱、「シッダルタ」は、その題材から豫想されるように、思想が純インド的なものではないらしいといふことはシッダルタの言葉を讀むと感ぜられる。マイヤーは「シッダルタ」が正に彼を印度の影響から解き放ち、自己と印度の差別を意識させたと言つてゐる。之の作品の書かれる十年前に中國思想を知つた事は彼の短文にもある。グネフコウは、既に中國思想を識る前にバガヴァート・ギータを讀んだヘッセは、その中に中國思想を先取して感じていたと言つてゐる。彼が中國の思想であるとしてあげる二つの點は、生命の只中にあつて、統一の思想を單に考ふるばかりでなく感ずることが出来るといふのは、ヘッセ的であり中國の思想であるとし、青年的、ビュリタンのとヘッセが名づける印度とは異なる喜ばしい聲が聞かれるとし、又最後のシッダルタの微笑は佛陀の世界逃避・世界征服から生ずる微笑ではなく、深い一體感から生れるのであると言つてゐる。その渡し守の生活と、人に與える感化は老子の無爲のはたらきを思わせる。(マイヤー)ここに全人間的思考の典型的具象化がある。中國思想についてはヘッセは或る時期、それなくしては生きていく術がなかつたらうと告白している。(評論集「戦争と平和」の序文では、非政治的な人間である自分が一貫して政治に對して道德的反應を貫き得た要因としてあげた三つのものゝ中に數えている。)特に印度思想との差は、現實尊重の態度である。(クンツェの印度の様々な主要な思想の簡潔な概観に於て見ても、相互の差異の著しさにも拘らず、世界逃避的傾向に於ては共通なものがある。)之こそヘッセが印度思想に於て得られず物足りなく思つていたものである。ここには印度的禁欲はなく、身體が必須の條件となつてゐる。對立が必然的であると共に幻影であることを知つてゐた老子には、ヘッセがモーツァルトについて「うづろい易い我々の感情を永遠に神的なも

のとして讚美している」と言う時、何か呼應するものがあるように思われる。「世界の偉大はあらゆる思考を凌駕する、人生の嚴肅さをあまりにも眞面目にとるな、我々は生きていてではなく、生かされているのだ」というヴィルヘルムの老子の解説は、そのままヘッセの作中にありそうに思われる程である。

シッダルタにはこのように中國的な要素があるが、ヘッセは自身この作品について「認識よりも愛を上位においてあること、ドグマを排し統一の體驗を中心にしたことに、キリスト教への顧慮、眞にプロテスタント的な特徴を感じるだろう」と言っている。この愛の献身という點にキリスト教的要素を見るのはマイヤーの極力強調する點である。愛を強調したヒンズー教そのバガヴァート・ギータに依らないのは、この敘事詩と新約聖書を讀めば理解され得る。愛に於ては聖書はより深い細緻な物語に満ちている。四六年に個人主義の危機に就いて述べ、「私は個人主義者であり、キリスト教の最善、最聖のものは、各人の魂に對する畏敬である」と言っている。ゲーテのように、個の尊重と愛に於て、キリスト教の倫理を、世界の觀照に於て東洋の思想を高いものと見ているように思われる。反論はあるだろうが、シュヴァイツァーが見るように、印度の思想からは、眞に責任ある倫理的行爲が生れる基盤が脆弱なのだろう。大乘佛教、例えば法華經の愛の強調も智慧あるものゝ説くところで實踐者イエスの十字架が缺けている。

東洋には内部時間の優位がある、ユングは無意識のある現象については因果の原理だけでは説明し難く同時の原理というものがある、平行して表われる現象がある、と言う。中國の易經はこの原理に依つていて、純粹な時間、純粹な空間というものがなく、空間と時間の一體性が強調される。現代物理学でも言われているようである。そしてこの空間的時間は絶えず輪廻し、繰返し歸つてくるものと見ることが、最終的にはこの具體的時間も迷妄にすぎない、實際は無であると言われる。(之は印度、中國に共通の思想である。) 扱、このような具體的時間を外部の時間とすれば、それに對して内部の時間がある。内部時間は又瞬間の中に永遠を見ることが出来る心である。このような空間時間の無への解消にも拘らず、現實の外部時間は極端に生き生きとしてゐる。之は禪を思い出させる。

扱、ヘッセの「クラインとワーグナー」以後の作品には「時間は存在しない」という言葉がよく出てくる。之を知らないところから人間の苦惱は生ずると言われる。「この時間は存在しない」というのは、この同時の原理にかかりを持つように思われる。之は又、初

めに述べた兩極にあるものが相補の関係にあることに通じていくものと思われる。そして、そこに統一の思想があらわれてくる。少しヘッセ自身の言葉を聞いてみることにしよう。シッダルタで、彼の古い友が彼の額に口づけすると急にいろいろな生けるもののが目の前に表われる、「ことごとくがへ死への意志」であつた。激しい痛ましい無常の告白であつた。しかしそのいずれもが死にはしなかつた。ただそれは姿を變えるのみであつた。常に新しい姿を得た。しかもその一つの姿と次の姿の間にはへ時」が存在しないのであつた、しかも、すべての上に絶えず形なきしかも實在する或る物が、薄いガラスか氷のように覆い張られているのであつた。この假面こそシッダルタの顔——形態の轉變流轉を覆うこのへ統一」の微笑み、千萬の生と死の上に立つこの同時の微笑み。きよらかな、はかり知れぬ、寛慈な、皮肉を帯べる、叡智に充てる、千様の佛佗の微笑み。」又、「クリングソールの最後の夏」では「何故、時間というものがあるのだ、なぜすべては、ばからしくも相前後して起り、沸騰して飽滿させる同時というものはないのだ。短かい一生を人は享樂し創造することはできるが、いつもいつも一つ一つの歌をうたうばかりで幾百の聲や樂器で同時に奏した交響樂というものはない。」又、「クラインとワーグナー」では「與えると得るを隔てる唯一のもの、世界を差別と苦惱と争闘を以て満たす唯一のものは、まだ叡智と神から遠い、荒れ狂う青年の状態に於ける若く奇怪で殘忍な人間の精神であつた。この精神が對立物や名前を發見したのだ。美醜善惡の區別をたてた……その發明の一つが時間だつた——益々內的に苦しみ、世界を複雑に面倒なものにするまことに精巧な機械だ……それは人間が自由になろうと思えばまず第一に取除かねばならぬ支柱だ。」又、「荒野の狼」の中でゲーテが言う。「我々不滅なもの達は物事を眞面目にとることを好まない、吾々は冗談が好きだ、君よ、眞面目という奴はへ時」というものが作り出したし、わざだ。打あけて言うがそれは時を有難がりすぎることから起るのだ……しかし永遠には時というものが無いのだ、永遠は一瞬だ。」そして永遠というのは多様の背後の統一ということでもあろう。「湯治客」では「統一は戯れと苦痛と哄笑に満ちた人生そのものであつた。君はいつでも統一の中に入ることが出来る。君が時間と空間、知識と無知とを知らず、因習から脱し、愛と獻身を以て總べての神々、總べての人々、總べての世界、總べての時代に屬する時はいつでも統一は君のものである。その時、君は統一と多様を同時に體驗し佛佗とキリストが君の傍を通りすぎるのを見る。」と言う。老子や禪の無我、無心ということに應ずるようである。(しかしこゝに、善惡は止揚され

るが、統一の中に自己が吸いこまれるような受働的な美的な一つの體驗があり、それと禪やヘッセの言う意志的なものとは異なるものであることを断つておこう。

作家としてヘッセは、常にこの二重の音楽を書きたいと思う。多様と同時に統一を、冗談の側に謹嚴を。何故なら人生はただその中のみあり、兩極の間の動搖にあるのだから、と言う。彼が、ジャン・パウルを好むのもこの點である。

* * *

生そのもの、世界そのものを合理によつて捉えることを初めから放棄した東洋は、合理によつて一面的に捉えられたものを疑いおそれる。生が相手である限り、合理的敘述によつて提示されたものが、理性で理解し得てもそれは何の「理解」にもならないようなものである。生・世界は本来不合理なのだから、逆説で言つて合理的理解を拒むことは、却つて眞の理解を守護することにならう。頭で理解し難いことを、人間の心のすべての機能、感情も意志も加わつて體得する。言葉は簡潔になる。終には維摩の沈黙の答えまで。無門關はすべての人を先ず拒否する厚い壁のようである。しかし覺りというものは非常に單純なものが豫感される、それは生そのものの自明さであらう。「湯治客」には「人間がその偉大な言葉の一つを識る爲に數年を犠牲にし、彼の生命を危険に曝さねばならないという事は恐らくよい事であり望ましい事であらう。」とある。しかしそこには二元を抜け出た、かの第三の段階で言われる言葉を、第二の段階しか知らぬものが聞く場合の危険が常にある。例えば非道德主義^{アンモラルイズム}等。

ディートリッヒ・ゼッケルは或る禪僧の繪について「西歐人にとつては排除し合うような具象性と抽象性のような對立が東洋人にとつては結合する、根本的な觀照の場でこのアンティテーゼは克服されている。日常の親近性と背後の形而上的な淵、日常物の暖かさとの清涼な無氣味が描かれている。無心によつて到達される、あらゆる對立差別をのりこえた自由な輕妙さ、どつしりした確かさ」と書いてある。ヘッセが禪を知つたのは第二次戰後ではないかと思われるが、「シッダルタ」に於ける印度と中國の綜合は、老子的中國に

入つた佛教・禪に於てはつきり表われているように思われる。

瞬間の中に永遠を、多様の中に統一を見るといふ體驗も又、現實には時間の流れに委ねられて永續するものでない事は「シッダルタ」の後で「湯治客」が書かれ「湯治客」の後で又「荒野の狼」が書かれるといふ経過が示している。しかし正にその事について、そういう苦惱が大きく肯定されるべき必須のものであると説かれる。即ちそれによつて統一は生き生きしたものに保たれるのである。然し一度、強烈に體驗されたものは一つの豫感、希望として、どんな分裂の状態に於ても生き續ける、失われてはならないのである。現實の分裂の時間に重なつて永遠の統一の時間が透けて見えながら流れているようなものである。此の存在を信賴することが彼のいふ信仰ではないだろうか。

生命の中から生れた二つのものを綜合することが成功するのは決して理性によつてではない。それは必然的な希求を持つた一つの生命を通らなければならぬ。東方の思想は生きて、ヘッセの中で大きな役割を演じた。しかし、中心となつたのはキリスト教であつた。但し、それは教會のキリスト教ではなく、神祕的キリスト教である。「私の信仰」三位一體を否定し、教會的な意味での十字架の意義を認めない(詩「救世主」)キリスト教は、實はもはやキリスト教とは認め難いものであろう。しかしこのヨーロッパ的教育があつたからこそ全く異質であり、理解しつくす事のできないアジアの宗教的訓練に對し、魅力があつても、すつかり身を委せざることはできなかつたのだと言つている。(手紙「若い日本の同僚へ」)しかし、ヘッセの中でこの東西の宗教は、矛盾に苦しむことはあつても、決裂することはなかつたのであつた。

Hermann Hesse : Gesammelte Werke (Suhrkamp Verlag)

*

*

*

Lily Abegg : Ostasien denkt anders

J. M. L. Kunze : Lebensgestaltung und Weltanschauung in Hermann Hesses Siddhartha

Gerhart Mayer : Die Begegnung des Christentums mit der asiatischen Religionen im Werk Hermann Hesses
Otto Engel : Hermann Hesse, Dichtung und Gedanke
Edmund Gnefkow : Hermann Hesse, Biographie 1952

* * *

Robert Boxberger, H. v. Glasenapp : Bhagavad-Gita, Das Lied der Gottheit
Karl Eugen Neumann : Dharmapadam, Der Wahrheitpfad
Jakob Fischer, Yokota Takezo : Vimarakirti Nirdeśa, Das Sutra über die Erlösung
續・鈴木大拙選集
江南文三 : 日本語の法華經

* * *

Lao-Tse, Richard Wilhelm : Tao-Te-King, Das Buch des Alten, Vom SINN und LEBEN
Richard Wilhelm : Chinesische Lebensweisheit
伊福部隆彦 : 老子道徳經研究

* * *

高橋義孝 : 無意識